「日本橋多事彩論」　第 11 回　　2021 年 7 月

～日本思考の原点・見直し論～

聞きかじりであることをご容赦頂いて話を進める。日本の最大の疫病危機は 10 代崇神天皇の時だったと言われている。約 2500 年前で、古事記等では人口激減、絶滅の危機と記録されている。2019 年 6 月に東大グループが発表した「縄文時代末期に人口約 26 万人が 8 万人程度まで減少した」との研究に合う（ただし、寒冷化による飢饉と説明されている）。もちろん、何の感染症だったかは不明だが、崇神天皇は神社改革を行い、今に引き継がれる“手水”を取り入れ、感染防止に役立ったと言う。日本人の“清潔”起源かも知れない。その後も、疫病撲滅祈願で建立された大仏殿の奈良時代、全然平安でなかった平安時代、鎖国をしていた江戸時代まで、度々疫病大流行の記録が残るが、14 世紀の欧州でのペスト大流行などの様に、日本の人口が 1/2, 1/3 になるようなことは無かった。

プラント・オパールなどの研究から、日本では少なくとも 4 千年前以上（1 万 2 千年前との説もある）から稲作が行われていたことが分かってきているが、教科書的には弥生時代＝渡来人による稲作伝播と教えられる。渡来文化で日本発展とされるものの、初代天皇とされる神武天皇以降、日本は稲作と共に、画期的なことは食糧の備蓄を行ってきたこととされる。江戸時代の武士の俸禄は古々米だったようだ。庶民まで新米を食べるのが一般的になったのは 1960 年代のコメの大豊作時代になってから。もちろん、天変地異の多い土地柄で、災害・飢饉がいつ来るか分からないためだ。ミニ氷河期の江戸時代に度々東北冷害が発生するが、基本的にコメは保存できる。日本人の災害に対する強さ、共同体意識、貯蓄志向の高さなどは、これが起源かも知れない。

世界史の“四大文明”がグラついている。黄河文明より古くて発達していた長江文明が分かってきたからだ（エジプトやメソポタミア文明より古いシュメール文明もあった）。「中国 4000 年の歴史」は戦前の日本の東洋学者が考案したとされる。その一つ、中国の三国志では、魏の曹操が一番強かったと言う。他が青銅剣に対し、鉄剣を使用していたためとされる。その鉄は日本が輸出していたのではないか、との見方がある。宮崎アニメ「もののけ姫」に出て来る“たたら製鉄”は古代からあり、古墳時代前期の遺跡である出雲・造山古墳から鉄剣が出土している。韓国南部に日本にしかない前方後円墳がまとまって見つかっているが、西日本か朝鮮半島南部で鉄剣を製造し、富を蓄えた豪族がいたのではないか、との推測になる。鉄の製造は山の木を燃料とする。他地域がハゲ山化、砂漠化したのに対し、日本は植林を行い、緑を保全したと言う。温暖多雨の気候条件もあって、言わば、環境先進国だったと言える。“遅れた日本”に渡来文化が伝わり発展したとの歴史観はここでも大きく異なる可能性がある。

江戸城を本格的に築城したのは、室町時代後期の武将・太田道灌。1456 年に建設を始め、翌年には完成したと言われる。応仁の乱の時代で、騒乱の京都から移り住む人々で発展したと言う。吉祥寺も江戸初期に移転を命じられまで、現在の大手町辺りにあったとされる。豊臣秀吉に命じられた徳川家康が入部する頃には交通の要衝ともなっていたようだが、家康は江戸を本格的な大都市として構築した。神田山を削り、運河を掘り、日比谷入江を埋め立て、江戸前島とつなげて都市形成を行った。江戸城を中心に「の」の字型に形成され、風水思想を取り入れ、神社仏閣を配置し、御三家（水戸、尾張、紀伊）で出入り街道を堅め、大名屋敷を譜代、外様に分けて配置した。正式に幕府の所在地となったのは 1603 年だが、1657 年には“明暦の大火”が記録され、都市災害の歴史をも歩むことになる。

慶長年間（1596－1615 年）に日本列島は大地震連発に見舞われるが、前半は伊予、豊後、伏見と西日本に集中、後半は会津、三陸などに広がった。短期的には江戸の価値を高めた可能性もなくはないが、江戸を襲ったのは、元禄地震（1703 年）、4 年後の宝永大地震（記録に残るわが国最大級の南海トラフ広域地震）と富士山噴火、幕末の 1854～1855 年には日本各地を襲った安政大地震などと続く。安政江戸地震と 1923 年の関東大震災との間隔、約 70 年間で、昭和の頃から「首都直下型地震」、「富士山噴火」が警告されて来た。今のところ発生は免れているが、東日本大震災でかなり揺れたのは記憶に新しい。日本人の災害に対する姿勢、防災・減災意識の高さは歴史的に構築されて来たと言える。その分、外敵に対する脆弱性に繋がっているかも知れないが。

世は「渋沢栄一ブーム」だが、日本の近代産業勃興に大きく貢献したとして、幕臣・小栗上野介（忠順：ただまさ）の再評価論が出ている。1860 年（安政 7 年）、33 歳の時、幕府の遣米使節団目付として渡米し、フィラデルフィアに乗り込んで通貨交換比率交渉を行った。是正までには至らなかったが、不平等条約の歯止めとなり、明治以降の不平等条約修正の端緒となった。ワシントン海軍工廠の見学で内外差を痛感し、帰国後 1865 年に横須賀製鉄所の建設を開始した。雇用規則、社内教育、洋式簿記などが導入され、明治の「会社」の原型を作った。他にも、軍備近代化・増強（軍艦建造の造船所、大砲建造など）、日本全国の商品流通（商社原型）、日本初の本格的ホテル「築地ホテル館」建設など、明治の近代産業勃興の基盤となった。フランスをバックにしたためか、官軍との徹底抗戦派だったためか、幼少より高慢な態度だったためか、1868 年蟄居していた群馬で、40 歳の若さで斬首処刑された。東郷平八郎にして、「日露海戦に勝てたのは小栗氏の功績が大きい」と述べている。歴史の転換点での産業構造の変革は国の命運を左右する。

あまり意識されていないが、傑出した人物によって変革が進む。コロナ禍による大変革は始まったばかりだが、国際関係や産業構造の変革に進もう。大活躍の二刀流・大谷翔平は日米関係や日本人の世界観を変えるかも知れない。　　以上

＜筆者 一尾仁司＞

1976 年大阪大学経済学部卒。山一證券で一貫して調査畑を歩み山一証券経済研究所大阪所長、その後、外資系及び国内証券会社日本株ストラテジストを経て、金融情報会社客員ストラテジストを歴任。ミクロ分析の経験をベースに、政治・経済、海外情勢など幅広い視点からの分析を得意とする。雑誌の執筆等多数。社団法人日本証券アナリスト協会検定会員。